全社員の才能を開花させる

個人の持つ「才能」が着目されるようになってきた。才能とは、他人によって価値を認められた他人とは違う能力を指す。人はそれぞれに異なる存在であり、その意味では誰もが才能のつぼみを持つといえる。では、そのつぼみはどのようにして開花するのか。本企画では、全社員の才能開花を可能にするしくみを明らかにし、そのフレームにあわせて4人の著名人のケースを見ていく。

人が成長するプロセスは一般化できるのか？
―物語の登場人物に見立てた仮説―

大久保幸夫　リクルートワークス研究所　所長

『Works』106号（2011.06 - 07）で「人材育成のグランドセオリーを考える」という特集を組んだときに、人材育成のプロセスは科学的な分析を繰り返していけば、一般化できるのではないか、という趣旨のことを書いた。私のなかでこの問題意識はずっと継続していて、経験則、暗黙知に支配されている人材育成というものを、再現可能で、かつしくみ化できるような形にまとめられないかと考えている。今回お届けする特集「全社員の才能を開花させる」も、その研究の一環であり、途中経過である。

人は誰でも才能のつぼみを持っている。しかもそのつぼみは１つではない。開花するには周囲の支援や環境が必要だ。なかにはとても素晴らしい才能のつぼみを持ちながら、自分自身でも気づくことのないまま枯らしてしまう人もいることだろう。才能の開花とは世間がそれを認めるという意味である。企業人であれば、まず社内で実績を認められ、評判を獲得するところが開花である。開花の後には、さらに大輪の花へと進化していくこともある。経営者やイノベーター、トッププロと呼ばれるような段階で、ここまで来ると、もはや評判は社内だけではとどまらない。

では開花のプロセスにはどのような人的支援（水やり）や環境（太陽と北風）がからんでいるのだろうか。

もちろん一人ひとり異なるだろうが、仕事の分野を超えてある程度共通している可能性もある。

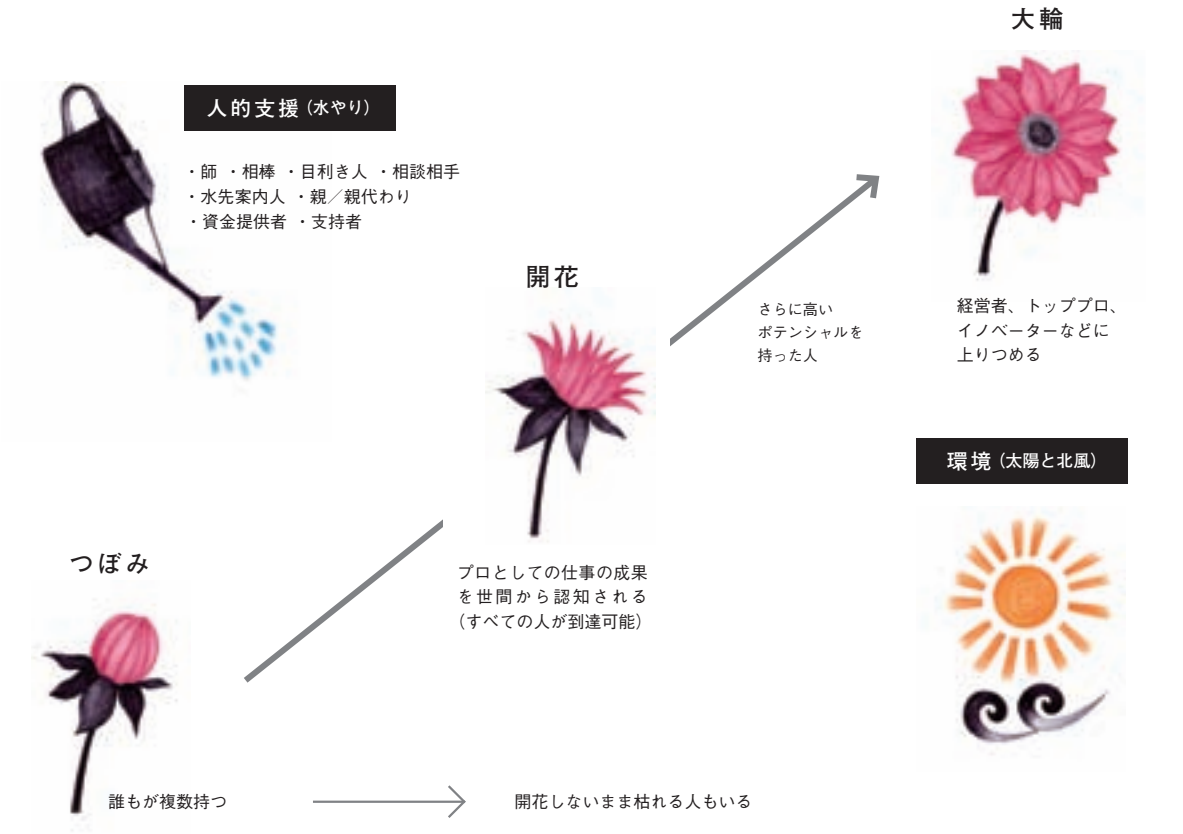
才能開花のプロセスを構造分析する

研究手法の１つに物語構造分析（または物語論）というものがある。ウラジーミル・プロップが1928年に著した『昔話の形態学』がそのはじまりといわれ、ロシア昔話百集を分析して、それらの話が７種類の登場人物と31の機能で構成されていることを解明している。人が成功する「物語」も、同じように構造分析できるのではないだろうか。

リクルートワークス研究所では、研究員たちが、このような問題意識を共有し、インタビューの分析や文献研究を行っている。その成果がま

Text = 柴田朋子（36、37、40、41P）、湊 美和（34、35、38、39P）
Photo = 刑部友康（34、38P）、鈴木慶子（36、40P）　Illustration = 水上多摩江

人が才能を開花するプロセス



出典：大久保幸夫作成

とまれば、読者の皆さんと共有したいと思うが、ここではまず、著名人４人のインタビューをご覧いただきたいと思う。

本人以外の登場人物は、あらかじめ８種類と想定した。それぞれの定義は下記の通りで、どのような役割（機能）を果たしたかということをインタビューで聞きながら振り分けていった。

①**「師」**……専門技能や知識を教え、導いてくれた人。ロールモデルにもなる。

②**「相棒」**……仕事のパートナーであり、才能を補完し合う関係の人。

③**「目利き人」**……まだつぼみの段階で才能を見抜いていた人。評価し、お墨付きを与えてくれた人。

④**「相談相手」**……悩んだときにアドバイスをくれる人。議論の相手。

⑤**「水先案内人」**……開花につながる機会・場を提供してくれた人。つないでくれた人。

⑥**「親／親代わり」**……身近にいて愛情を持って褒めたり、励ましたりしてくれる人。

⑦**「資金提供者」**……資金提供または投資をしてくれる人。

⑧**「支持者」**……応援したり協力したりしてくれる人。積極的フォロワー。ファン。

インタビューには直接出てきていなくても、実際には「親／親代わり」や「支持者」などはいる可能性が高い。組織に所属している場合は、「資金提供者」は実質その組織になることが多い。企業人であれば上司が１人２役とか３役をやることが普通かもしれない。

もう１つの要素である環境だが、こちらは大きく「太陽」と「北風」というメタファーを使った。恵まれた環境だったと思える要素が「太陽」で、あの逆境こそがエネルギーになったと思える要素が「北風」である。「北風」は時に大きな促進剤になるが、「北風」ばかりではつらくて枯れてしまう。やはり暖かい「太陽」は不可欠なのだろう。

さて、ここから先は事例を読んでいただきたい。研究はまだ緒についたばかり。その先に人材育成の見える化につながる何かが出てくるのか。今後の研究をご期待いただきたい。

INTERVIEW vol.1

「人を笑わせたい」抑えていた気持ちを解き放ち、才能開花

キンタロー。氏

お笑い芸人

1981年愛知県岡崎市生まれ。2003年関西外国語大学短期大学部を卒業後、社交ダンスの講師や会社員を経て、2011年松竹芸能タレントスクールに入学。前田敦子氏のものまねがきっかけで、芸人として注目されるようになる。オリコンの2013年上半期ブレイク芸人ランキング3位。

現在、ものまね芸人として活躍するキンタロー。氏の才能。それは、20年という歳月を経て開花した。

一度膨らんだ才能のつぼみを恋愛に溺れ、枯らしかけた

家にあったカラオケで演歌を歌うと、周りの大人が笑った。それがキンタロー。氏の原風景だ。「２歳くらいで、歌詞の意味もわからないのに、繰り返し歌っていました。人が笑っている空間が幸せだったんです」

小学校では学年を追うごとに「面白い子」の本領を発揮し、卒業時には、キンタロー。氏が将来芸人になることを疑う者はいなかった。このとき芽吹いた才能のつぼみは、大学入学後に、膨らみ始める。

キンタロー。氏は、高校時代のカナダ留学で習得した語学力を生かして、関西外国語大学短期大学部に進学した。「いつかは芸人になろうと思っていたので、大阪であれば、お笑いの勉強になると思ったんです」

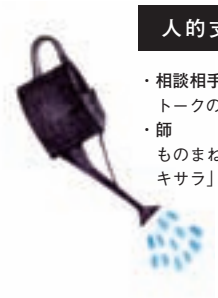
大学では、「芸の肥やしになりそう」という理由で社交ダンス部に入り、練習に励む一方で、ほかの部員を笑わすことにも一生懸命だった。そんなキンタロー。氏の芸人になるという夢を、部員たちは、“太陽”のようにあたたかく応援してくれた。だが、短大２年のときに受けた吉本新喜劇のオーディションは、合格したにもかかわらず辞退してしまう。「私が恋愛感情を抱いていた先輩が、反対したんです。また、ダンスの全国大会で４位に入賞したことで、自分にはその道が向いているのかなと思うようになって。卒業後は大阪で社交ダンスの講師になりました」

就職してからは、芸人になることを反対した先輩との交際も始まり、膨らみかけたお笑いの才能のつぼみは、また堅い状態に戻った。だが、そんな恋愛感情も、恋人の５度目の浮気で一気に失せた。「別れたあとも、名古屋で社交ダンスの講師を続けましたが、ダンスへの熱は冷め始めていました。そんなとき、頚椎（けいつい）ヘルニアになったんです。ダンスをやめろ、っていうお告げだと思いました」

「まだこんなとこにいたのか」先輩の言葉で、一気に開花へ

恋人と別れ、社交ダンスもやめて、会社員として働き始めたキンタロー。氏は、芸人を目指していたことを思い出した。「芸人になるのは無理でも、お笑いをやりたい」。そう思ったキンタロー。氏は、まずはトーク

キンタロー。氏の才能開花のプロセス



人的支援（水やり）

- **相談相手**
  トークの達人・DJの小林拓一郎氏
- **師**
  ものまねショーパブ「そっくり館キサラ」の先輩芸人
- **水先案内人**
  社交ダンス部の2つ上の先輩・中村友則氏
- **支持者**
  率直な感想を言ってくれる松竹芸能のスタッフ

大輪

お笑い芸人

「まねる相手の人気や認知度に依存するものまね芸だけでなく、ギャグやコントなどいろんな芸に挑戦したい。衣装や小道具がなくても、身ひとつで笑いがとれる芸人になりたいと思っています」（キンタロー。氏）

開花

ものまね芸人

2012年、松竹芸能の若手芸人が競う観客投票型ライブで、元AKB48前田敦子氏のものまねを披露して優勝。それ以降活躍の場が増え、前田氏だけでなく、光浦靖子氏やデヴィ夫人のものまねができる芸人として注目を集める。

つぼみ

「人を笑わせるのが好き」

短大では社交ダンス部で表現力を養成し、また部員を笑わすことにも力を注ぐ。恋人と別れ、社交ダンスの講師をやめて以降は、友人の結婚式の余興で、自分が考えたお笑いネタを披露していた。

環境（太陽と北風）

太陽要素

- ボケが求められる、ツッコミ文化が息づく大阪の町
- 部員が応援してくれた関西外国語大学社交ダンス部
- ものまね芸人の登竜門・ショーパブ「そっくり館キサラ」

を学ぼうとDJ養成スクールに入学した。そこで、スクールの講師で、現役のDJとしても活躍する小林拓一郎氏に出会う。いつも教室のみんなを笑わせようと頑張っているキンタロー。氏を見て、小林氏は「ほんとは芸人になりたいんでしょ」と声をかけてきた。それ以降、小林氏は、キンタロー。氏のよき“相談相手”となった。

同じ頃、友人の結婚式で、社交ダンス部の２つ上の先輩・中村友則氏に再会した。余興でお笑い芸を披露したキンタロー。氏に向かって、中村氏は、「まだ、こんなとこにおったのか。とっくに芸能界に行ったと思ってたわ」と言い放った。「はっとしました。そうだった、私は芸人になるべきなんだと思えたんです」

すぐに、新人タレントオーディションを探し、松竹芸能を受験した。結果は、学費免除という特別待遇で合格。中村氏が“水先案内人”となり、枯れかけたお笑いの才能のつぼみが、再び元気を取り戻した。

だが、１年の養成期間が終了し、自分にはものまね芸が合っているとわかったものの、その才能を試す機会は用意されてはいなかった。ライブで芸を披露するためには、事務所の若手芸人が競う「勝ち抜きお笑いライブ」で優勝するしかない。「前田敦子さんのものまねでいこうと決めました。名古屋にいたときに『前田さんに似ている』と、言われたことがあったんです」。そのときは、前田氏がAKB48卒業を宣言したばかり。卒業前に間に合わせようと猛練習した結果、見事優勝した。

それ以降、2012年の１年間は、オーディションとネタ作りを繰り返した。そして、ライブに出演したときは、必ず事務所のスタッフに感想を聞き、必要と思う意見は取り入れた。また、ものまね芸人の登竜門「そっくり館キサラ」の舞台に出演できるようになり、先輩芸人たちからアドバイスをもらえるようになった。

こうして、“支持者”である事務所のスタッフや、先輩芸人という“師”によって、キンタロー。氏の芸は洗練され、テレビに出る機会が増えていった。多くの人がキンタロー。氏を知るようになり、ものまね芸人として開花したのである。

その勢いは衰えることを知らず、2013年にはキンタロー。氏の顔を見ない日はないほどだった。今後は、さらに芸の幅を広げ、ものまね以外でも笑いのとれる芸人を目指す。

スポーツと人との出会いが導いた タレントとしての開花の道

INTERVIEW vol.2

武井 壮氏

百獣の王、タレント

1973年東京都葛飾区生まれ。陸上・十種競技の元日本チャンピオン。白いタンクトップ姿がトレードマークで、「百獣の王」を名乗る。「あらゆる動物と戦うシミュレーションを行い、2万戦無敗だった」という。2013年10月「世界マスターズ陸上競技選手権大会」200m走で銅メダル獲得。
twitterアカウント　@sosotakei

「百獣の王」武井壮氏。誰も使わなかった肩書を自らに付け、新しいタイプのタレントとして活躍している。

いつかは何者かになりたい、認められたいと思い続けてきた

武井氏は、中学では野球、高校ではボクシングなど、さまざまなスポーツに取り組んできた。24歳のとき、日本陸上競技選手権大会男子十種競技で優勝。その後は独自のスポーツ理論によるトレーニング方法で、野球やゴルフなど、プロスポーツ選手のトレーナーとしても活躍していた。39歳から本格的に芸能活動を始めた武井氏だが、その理由の１つは、多くの人に認められるためだった。

「十種競技で優勝した翌日、町を歩いていても、誰も自分に気づかないんです。大きなことを成し遂げたと思っていただけに愕然としました」

幼少の頃から何者かになりたい、認められたいという気持ちが人一倍強かった武井氏は、自分に無関心な世間という“北風”に、かえってこの状況をなんとかしなくては、という気持ちがわいてきた。

「人がスポーツに価値を見出すのは、記録や技術の高さではなく、その競技やその選手を見たいと思っているかどうかが大きいと感じたんです。だとすれば、まずはメディアを通して多くの人に見たい、と思ってもらえる人間になろうと決意しました」

もう１つの理由は、“水先案内人”となる２歳上の兄にあった。俳優を目指していた兄は、20歳くらいから徐々にテレビにも出演するようになっていた。ところが、23歳で病に倒れ、志半ばでこの世を去った。それから数年後、スポーツだけでは将来の活路が見出せないと考えあぐねていた武井氏は、兄の姿を思い出した。

「兄が生き甲斐を感じていた芸能界には、多くの人が『見たい』と思うスターがたくさんいる。スポーツだけでは叶わなかった願いが叶う場所はそこかもしれない。いつか自分の身体能力を生かして挑戦できれば」。そう考えるようになった。

人から人へ、つながりが広がり「うもれびと」にたどり着く

その後、武井氏は、ある社会人野球チームに入った。「そこで知り合ったタレントの先輩は、どこに行っても周囲の人を笑顔にしてしまう、魔法使いのような人でした。自分もあんな魔法を使えるようになりたい、と思って見ていました」

武井壮氏の才能開花のプロセス

人的支援（水やり）

- 師　先輩芸人
- 目利き人　ピエール瀧氏
- 相棒　森山直太朗氏
- 相談相手　マネージャー
- 水先案内人
  芸能界の仕事の魅力を伝えた実兄

つぼみ

運動能力を生かして芸能界で活躍したい

20代はスポーツで実績を積み、30代から芸能界で運動能力を生かした活動を模索。2006年のピエール瀧氏との出会いがきっかけとなり、バラエティ番組に森山直太朗氏のマラソントレーナー役としてレギュラー出演。

開花

「うもれびと」出演で注目を浴びる

2012年に中居正広氏が司会する深夜番組「うもれびと」に出演し、それまで準備してきた「動物の倒し方」を披露したことで一躍人気者に。以降、「百獣の王」という肩書でバラエティ番組にひっぱりだことなる。

大輪

たくさんの人に求められるタレントに

「多くの人に『武井壮を見て元気になった』と言ってもらえるようになりたい。もっとたくさんの人を幸せにして、必要とされたいです」（武井氏）

環境（太陽と北風）

太陽要素

- 路上トレーニング後の行きつけにしていた、友人が経営する西麻布のバー

北風要素

- 日本陸上選手権の十種競技で優勝したあと、誰も気づいてくれないという世間

武井氏が“師”と仰ぐこの先輩芸人は、次々と自分のタレント仲間を紹介し、また、当時から「面白い十種競技の元チャンピオンがいる」とテレビ局のプロデューサーたちにも話を広めてくれていた。

武井氏自身は、夜の六本木でトレーニングをしては、友人が経営する西麻布のバーで牛乳を飲み、骨型の犬用のガムを噛んで顎を鍛えるという生活をしていた。武井氏のそんな自由な振る舞いを許してくれる“太陽”のようなバーに、ある日、ミュージシャンのピエール瀧氏がやってきた。「ピエールさんは、僕のことをたいへん面白がり、ご自身が司会をしているテレビ番組に出演させてくれたんです」

ピエール氏が“目利き人”となって、初のレギュラー出演を果たしたこの番組では、歌手の森山直太朗氏のマラソントレーナー役を務めた。「直太朗のライブに誘われて行ったら、5000人もの観客が感動して泣いたり、幸せそうな笑顔になったりしてるんですよ。衝撃でした。本当のスターというのは、人の心を動かして幸せにしてしまうんだって」

それを契機に、武井氏は、自分はどうしたら人を幸せにできるのかを考えるようになった。 森山氏という“相棒”に出会い、武井氏の才能のつぼみは膨らみ始めたのだ。

「僕の強みは、スポーツで鍛えた身体と、動物好きで動物の生態に詳しいこと。この２つを生かして何かできないか」。それから７年かけて研究をし、完成させたのが、あらゆる動物と戦うシミュレーションだ。自ら「百獣の王を目指している」と語り、同時期に出会ったマネージャーという“相談相手”とともに本格的に芸能活動をスタートした。

「フジテレビに行ったとき、以前、先輩芸人が僕の話をしてくれていたプロデューサーに会ったんです。その方の番組のスタッフが、僕の『動物の倒し方』を面白いと言ってくれて『うもれびと』への出演が決まりました」。「うもれびと」とは、まだ売れていない芸能人を紹介する番組だ。番組中で「動物の倒し方」を披露し、百獣の王を目指す男として紹介されたことで注目を集め、武井氏の才能は一気に開花した。

「僕にとって仕事とは、人を元気にして、やればやるほど必要としてくれる人が増えるもの。一度しかない人生、攻めて攻め続けたい」。武井氏は、これからも走り続けていく。

INTERVIEW
vol. 3

信頼できる人々との巡り合いによって映画界の「わらしべ長者」になる

井口奈己氏

映画監督

1967年東京都生まれ。はじめて自主製作した8ミリ映画『犬猫』でPFFアワード2001の企画賞を受賞。2004年には『犬猫』を35ミリでリメイクし、商業映画デビュー。日本映画監督協会新人賞を受賞した。写真は、劇場用映画第3弾となる2月8日（土）全国ロードショーの『ニシノユキヒコの恋と冒険』

©2014「ニシノユキヒコの恋と冒険」製作委員会

女性初となる日本映画監督協会新人賞を受賞した井口奈己氏。その才能開花の道のりは、信頼できる人々との出会いに満ちていた。

「これが映画だ」と言える作品をつくりたい

井口氏は、幼い頃から映画監督になりたかったわけではない。「高校卒業後、何もしていない期間があって。ある日、家で深夜番組を見ていたら、映像作家が『映画は個人の好みでつくっていい』と言ったんです。撮影所ではなく、個人でも映画をつくれるのかと、驚きました」

それがきっかけとなり、映画学校に入学したが、授業の内容には興味がわかず、雑誌の募集で自主映画*1の仕上げにかかわったとき、はじめて映画作りの楽しさを知る。

「その場にいた大人たちは、経済性や生産性などは気にせずに映画をつくっていました。当時はバブルで、贅沢な暮らしを求める人ばかりだったので、そんな経済活動に参加していない人たちがいることが新鮮でした」。そして、このとき「これが映画だ」と思える作品に出合う。自主映画の製作スタッフの家で観た、成瀬巳喜男監督やエリック・ロメール監督の作品だ。どうすれば、こんな素晴らしい映画になるのか。学校の卒業製作で映画を撮った経験から、簡単には映画にならないことがわかった。「これが映画だ」と言える映画をつくる術（すべ）とは——。そう自らに問い続け、井口氏は映画製作にのめり込んでいく。

当初は、録音技師の鈴木昭彦氏の助手として、映画製作に参加した。鈴木氏は後に、井口氏の“相棒”となる人物である。録音スタジオでの作業が苦手だった井口氏は、しばらくして撮影現場での仕事が中心となる記録への職種変更を企てた。だが、相談した先輩に、「あなたは記録に向いていない。撮影現場で仕事がしたいのなら、監督をやったら」と言われ、監督に挑戦する。「ちょうど、映画に出たいって相談をしてきた友人がいたんです。じゃあ、30歳になる前にやってみようかと」

その友人の失恋エピソードをもとに脚本を井口氏が担当し、録音と撮影は鈴木氏が引き受けてくれた。そのほかのスタッフは紹介で集め、母親が井口氏の結婚資金としてためたお金を取り崩して、製作費に充てた。

こうしてなんとか撮影を始めたものの、すべてがはじめての経験で、

*1　自主製作の映画のこと。日本では劇場用につくられた商業映画ではない種類の映画を指す。

井口奈己氏の才能開花のプロセス

人的支援（水やり）

- **相棒**
  録音技師　鈴木昭彦氏
- **目利き人であり水先案内人であり師**
  映画評論家の山田宏一氏
- **資金提供者**
  結婚資金としてお金をためていた母親

つぼみ

映画作りにかかわりたい

自主映画の製作現場にかかわったことで、さまざまな映画を観るようになる。なかでも成瀬巳喜男監督の『驟雨（しゅうう）』やエリック・ロメール監督の『友だちの恋人』に衝撃を受け、自分も映画をつくりたいと思う。

開花

35ミリ版『犬猫』で多数の賞を受賞

PFFアワード2001に入選した8ミリ版『犬猫』を商業用の35ミリにリメイクした作品で、日本映画監督協会新人賞を受賞した。また、2004年のトリノ国際映画祭にて審査員特別賞、国際批評家連盟賞、最優秀脚本特別賞を受賞。

大輪

さまざまなジャンルの映画に挑戦したい

2作目、3作目ともに、さまざまなトラブルがあり、準備期間が長くなった。だが、「これからはバンバン撮っていきたいです。時代劇やアクション、ホラーなど、新しいジャンルに挑戦したい」と井口氏は語る。

環境（太陽と北風）

太陽要素

- はじめて参加した自主映画の製作現場

北風要素

- 3年にわたった8ミリ版『犬猫』の製作現場

どこで演技に「OK」を出せばいいかもわからない。「『もうやめたい』って泣くたびに、鈴木さんから『映画を完成させる以外に、巻き込んでしまった人たちにお詫びをする方法はないだろ』って怒られていました」

結局、撮影に2年、編集に1年かけ、2000年に8ミリ版『犬猫』が完成。力試しと思って応募したPFFアワード*2で企画賞を受賞し、才能のつぼみが一気に膨らんだ。

8ミリ作品から商業映画へ映画界の「わらしべ長者」になる

8ミリ版『犬猫』は、東京・中野の映画館での一般上映も決まった。そして、その試写を観た映画評論家の山田宏一氏が、ネット上で作品を賞賛したことが契機となって、商業用にリメイクすることになる。「山田さんの批評を読んだ映画プロデューサーが、35ミリへのリメイクで商業映画を撮らないかと、電話をくれたんです」。ここでは、山田氏が“目利き人”、かつ“水先案内人”となった。

とはいえ、8ミリ版でやりきったという思いがあり、話を聞いた当初は手放しで喜べなかった。「悩んでいるときに、山田さんが、自作を数多くリメイクしているマキノ雅弘監督の映画に誘ってくれたんです。同じ話でも、役者が異なるだけで違う映画になるのを見て、違う映画をつくるつもりでやろうと決めました」

8ミリ版の批評をしてもらって以来、山田氏とは多くの映画を一緒に観に行った。そのときは、大学で教鞭をとる山田氏の教え子も加わり、映画を観たあとには、3人で感想を言い合った。その話のなかから、映画作りのヒントを得ることもあった。井口氏の才能を見抜いた山田氏は、映画の“師”にもなっていく。

35ミリ版『犬猫』は、2004年に公開され、井口氏は前述の日本映画監督協会新人賞を受賞。また、同年のトリノ国際映画祭では、審査員特別賞ほか2賞を受賞し、才能を開花させた。その後も、2008年には商業映画2作目となる『人のセックスを笑うな』で恋愛映画に挑戦し、満を持しての3作目『ニシノユキヒコの恋と冒険』（2月公開）では、人生の長い時間経過を描くことに挑んでいる。「毎回、新しいことをやろうと思っている」と語る井口氏。「これが映画」と言える映画をつくるために、次はどんなことに取り組み、大輪へと進化していくのだろうか。

＊2 自主映画のための映画祭「ぴあフィルムフェスティバル」で展開されるコンペティション。新しい才能の発見と育成が目的。

大学時代に芽吹いたつぼみは“目利き人”との出会いで早期に開いた

INTERVIEW vol.4

しりあがり寿（ことぶき）氏

漫画家

1958年静岡県静岡市生まれ。1981年多摩美術大学卒業後、キリンビール入社。同年、漫画家としてデビュー。キリンビールでは、「キリン一番搾り」や「ハートランドビール」などの宣伝を担当した。1994年に退職後、創作活動に専念。代表作は『弥次喜多 in DEEP』『地球防衛家のヒトビト』など。

しりあがり寿氏は、ギャグから時事まで、幅広い分野で活躍する漫画家である。物心ついたときから漫画が好きで、美大に進学した頃には「いつか漫画家になるんだろうな」と思っていた。そのつぼみは、まっすぐに開花へとつながった。

入社1年目で漫画家デビュー ダブルキャリアで13年続けた

大学時代は同人誌に漫画を投稿していたものの、卒業後はキリンビールに就職した。「漫画が描きたかったので、土日が自由になる仕事がいいと思っていました。メーカーで宣伝の仕事ができたらいいのかな、と」

入社後は希望通りマーケティング部で宣伝を担当することになった。漫画家デビューのきっかけは、１年目の夏にやってきた。大学時代に同人誌に描いた作品を見た編集者・宮永秋彦氏から連絡が入ったのだ。しりあがり氏の才能のつぼみは、早くも現れた“目利き人”によって、膨らみ始めた。

就業規則では副業は認められていなかったため、作品が掲載された本を持って部長に相談に行ったところ、部長は「俺たちがゴルフをやるようなものだからやればいい」と言ってくれた。課長も、漫画家としての活動を認めてくれるように人事に掛け合ってくれた。しりあがり氏にとって、部長や課長は、才能を試すことを応援してくれる“支持者”であり、会社はその才能のつぼみをあたたかく照らしてくれる“太陽”のような環境だった。「ダブルキャリアを続けることは苦にならなかったですね。毎日池袋駅で乗り換えていたんですけど、そこで勤め人と漫画家の切り替えができていましたね」

デビュー作と２作目は、同人誌からの転載だったため、３作目の『流星課長』が初のオリジナル作となった。通勤電車で席を取るために闘う課長の話で、通勤中にアイデアがひらめいた。この作品以降、定期的に依頼があり、平日の夜と休日に原稿を描き、会社の昼休みを利用して原稿の受け渡しをするような多忙な日々だった。こうして漫画家としての仕事が増えていく一方で、会社の仕事も忙しくなっていった。

「キリンビールで印象に残っている仕事は、『キリン一番搾り』の新発売キャンペーンですね。代理店も交えた混合チームで担当したんですが、メンバーが面白い人ばかりでした」。なかでも上司の前田仁氏は、しりあ

しりあがり寿氏の才能開花のプロセス

人的支援（水やり）

- **師**
  デザイナーの中西元男氏
  『弥次喜多 in DEEP』の編集担当者・秋山協一郎氏
- **目利き人**
  最初に仕事を依頼してくれた編集者・宮永秋彦氏
- **相棒**
  安齋肇氏はじめ、さまざまな分野で才能を発揮する仲間たち
- **支持者**
  前田仁氏をはじめ、ダブルキャリアを支援してくれたキリンビール時代の上司

大輪

漫画以外にも活動が広がる

近年は、エッセイ、絵本、CM、音楽、アートなど幅広い分野で活動している。「『ドラゴンクエスト』みたいな感じ。次々とクエストをクリアしていく。その都度役割が変わるみたいなのが好きなんだよね」（しりあがり氏）

開花

つぼみ

社会人1年目で漫画家デビュー

物心ついたときから漫画が好きで、多摩美術大学へ進学。大学では同人誌で漫画を描き、面白いと評判になっていた。就職した1981年の夏、同人誌を見た出版社から連絡が入り、同人誌の転載という形でデビューを果たした。

文藝春秋漫画賞・手塚治虫文化賞を受賞

会社を辞めて時間ができたことで、長編漫画が描けるようになった。2000年に『時事おやじ2000』『ゆるゆるオヤジ』で文藝春秋漫画賞、2001年に『弥次喜多 in DEEP』で手塚治虫文化賞マンガ優秀賞を受賞した。

環境（太陽と北風）

太陽要素

- ダブルキャリアに理解のあったキリンビール
- イメージ戦略やブランディングを学ばせてくれた「一番搾りプロジェクト」

がり氏の状況を理解し、サポートしてくれる“支持者”だった。また、CI導入の際、力添えしてくれたPAOSのデザイナー・中西元男氏は、イメージ戦略やブランディングについて教えてくれた“師”だった。

会社では広告、家では漫画と、どちらもモノをつくる仕事だったが、発注する広告主と依頼をうけるアーティストという両方の仕事を体験したことで、幅広い視野を養うことができた。それが、「何々漫画家」というジャンル分けのできない稀有な漫画家としての活動につながり、才能のつぼみはさらに膨らんでいった。

こうして、ダブルキャリアを順調に続けたしりあがり氏だが、徐々に組織で管理職的役割を求められてきていると感じ、退職を決意する。「このまま昇進したとしても、自分の器では、キリンビールのような大きな組織を動かすのは無理。そろそろ潮時かなと。それに何より、描きたい漫画がいっぱいあったんです」

満を持して漫画家専業に一気に才能が花開いた

会社を辞めて時間ができたことで、長編漫画も描けるようになった。そして、退職から6年後の2000年に文藝春秋漫画賞、2001年に手塚治虫文化賞マンガ優秀賞と立て続けに受賞を果たし、しりあがり氏の才能は見事に花開いた。その才能開花に大きくかかわったのが“師”といえる編集者・秋山協一郎氏との出会いだ。「秋山さんは、僕のことをよくわかっていて、『お前のやりたいことを20倍に薄めろ』なんて言われました」。秋山氏は、編集者として的確なアドバイスをすることで、しりあがり氏が描きたい世界が、読み手に届く表現になるように、一緒になって作品をつくりあげてきたのだ。

現在、しりあがり氏は、エッセイ、アニメ、インスタレーション*1、バンド、イベントの企画など、活動の幅を広げている。それらは会社を辞めたばかりの頃、イラストレーターの安齋肇氏などに紹介された人たちの縁がきっかけになっている。こうした多方面にわたる創作活動が、漫画にもよい影響を与えていることは間違いない。その意味では、安齋氏や活動を共にする仲間は、才能を補い合う“相棒”といえる。「人から求められてやる仕事が好きなんだよね」というしりあがり氏は、仲間の要求に応えてこの先も、才能の花を大きく咲かせていくのだろう。

＊1　室内や屋外などにオブジェや装置を置き、空間全体を作品として体験させる芸術